

## ニヤーヤカンダリーの紹介する唯識説

本 多 惠

〔唯識派〕<sup>1)</sup> おも、この二性の発生等の説明はすべて不合理ではないか。何故なら、そ(の二性)の存在する証拠が無いからである。

〔反対派〕 二二 という認識が証拠である。

〔唯識派〕 そうではない。何故なら、把握される相が無いからである。即ち、認識作用によって把握される対象は、発生しているかまたは発生していないかであろう。(ところで)どちらにしても不合理である。何故なら、発生していないものは存在しないし、また発生したものには存続が無いからである。

〔反対派〕 過去の対象のみが認識作用によって把握される。何故なら、こ(の認識作用)を生ぜしめるから。

〔唯識派〕 そうではない。何故なら、(過去の対象は)現に存在するものとして現われていることと矛盾するし、感官もまた把握されるという過が附随するからである。

〔反対派〕 自己の原因の集合体によって作られた (samag-

ニヤヤ) 事物の本性は次のようなものに他ならない。即ち(認識を)生ぜしめる点で(事物と感官との間には)差異はなくても、こ(の事物)のみが(本性上)把握されるが、感官等は(把握され)ない。そして(事物が)現に存在していることが現われ(て把握され)るのは、こ(の事物の本性の存在)の直後の瞬間のことである。

〔唯識派〕 更に、こ(の事物が)把握されることとは何か。

〔反対派〕 認識作用に対する原因であることである。

〔唯識派〕 また更に、感官が把握されるということになつてしまふ。何故なら、原因であるということだけについていえば、これ(即ち感官と対象)と差異がないからである。

〔反対派〕 認識作用の自己反省 (svasamvedana)こそ、他者(である事物)が把握されることである。

〔唯識派〕 一者が本性を意識することが、(全く別の)他者が把握されることであるとするのは、奇妙至極である。

〔反対派〕 奇妙ではない。何故なら、本性は追求し尽くせ

るものではないから。実に識別作用(vijñāna)は対象をとらえることを本性としている。故に、その(対象の)本性を意識することこそ対象の把握である。そして、この対象より生じたもののみをとらえるのであって、すべてのものを(とらえる)ではない。従って過利遍充の過はない。

〔唯識派〕そうではない。何故なら、唯一の対象だからである。対象より生じたということは、認識作用から発生したことである。そして、その(発生)は唯一であり、認識作用と対象との両者の性質ではない。従って、対象だと決定することは(出来)ない。また、もしも(認識作用は対象に属するのではない。何故なら、他者の性質だから、また(認識作用と対象との)両者を決定するからである。(認識作用と対象との)両者は相互に把握される者とする者との関係にあることが確立している。)というなら、そうではない。何故なら、結合関係を有するものの内の一つだけを決定しているのだから。また、過去と未来との両事物が認識作用に対して原因となることはない。何故なら、(それらは現在)存在していないから。

〔反対派〕対象と対象を有する(主観)との関係が決定するから、把握されるものとの関係が決定する。

〔唯識派〕そうではない。何故なら、(客観と主観との関係及び把握者と被把握者との関係の両者は)同一だからである。即

ち、対象であることは把握されることに他ならず、対象を有する(主観)ということとは把握する者であることに他ならない。この両者にそれぞれ定めた原因を問う時、この同じ答が述べられるなら、すべての答えの理念を越えてしま<sup>(3)</sup>う。

〔反対派〕定めた事物をとらえる者であることもまた、認識作用の本性である。

〔唯識派〕この(認識作用の)本性が、もしも無原因であるなら、(対象の)定ることはない。また、もしも原因の故に同じ(即ち対象が定る)と言ひなら、本性だと宣言することは無意味であるし、吾々はそれからの発生(∥因果関係)以外(の原因)を考えることは出来ない。

〔反対派〕認識作用を生ぜしめ、認識作用と同じ姿を与えるものが(この認識作用)によって把握される。他のものは(把握され)ない。そして、認識作用においても確かに対象の姿があると承認されねばならない。何故なら、さもなければ、姿を持たず(caitanya)知覚のみのものは、すべての対象に対して差異がないからである。(また)(この知覚)は青に関するものであり、この(知覚)は黄に関するものである。(と別々に確立することが不合理となつて、従つていろいろな対象を理解することがなくなるからである。だからこそ、正しい認識根拠は対象の姿をとる、と言ひのである。そして、この独特な(対象の姿)は認識を特殊な対象と結びつ

ける。(けれども) 感官等は(すべての知覚に) 共通であるの  
で、(特殊な対象のみと結びつけることは) ない。このことが、  
「実は、対象の性以外にはこ(の知性) を対象と結びつけ  
ない。故に、正しい認識の対象を獲得するから、正しい認  
識根拠は認識の対象の姿をとる。」<sup>(4)</sup>

と言われている。また他所で(次のように) 言われている。

「実に、(単なる) そ(の対象) の感受が知の存在であると  
するのは不合理である。何故なら、こ(の感受) はすべて  
の場合に差異がないからである。けれども、同性がこ(の  
感受) に侵入して、(対象と) 同じ姿を与えるだろう。」

〔唯識派〕姿を有する認識作用によって事物が経験される  
のか、それともその(事物の) 姿が(経験されるの) か、それ  
とも両者が(経験されるの) か。(1) 先ず両者ではない。何故  
なら、常に(これは青い) という唯一の姿のみを意識するか  
らである。(2) また、事物が認識作用によって経験されるとい  
うのは不合理である。何故なら、こ(の事物) の本性が存在  
する時には、認識作用は発生しないからであり、また、認識  
作用のある時には過去が現在として現われることは不合理だ  
からである。(認識作用の補助を受けた瞬間が現在として現  
われる。) というのは自派の定説に忠実(過ぎる)。何故なら、  
こ(の過去の事物) はこ(の現在の認識) によって把握されな  
いからである。また、この場合、識別作用が特定の事物を知

覚させ、すべて(の事物) を(知覚させ) ない理由は何か。実  
に(事物と識別作用との) 両者の間には同一性はないし、因果  
関係が(両者の) 別々に確立している理由でもない、と言わ  
れている。

〔反対派〕その(事物の) 姿であることが(認識作用の) 決  
定因である。

〔唯識派〕一つの青い瞬間(即ち青を認識する瞬間) が同じ  
姿をした他の青を把握しないのは何故か。

〔反対派〕把握者たることは、認識作用にだけある本性で  
あって、事物にはない。

〔唯識派〕そうであっても、唯一の青という認識作用がす  
べての者の瞬間を把握するものとなる。何故なら、この  
(青い) 姿という点で差異がないからである。

〔反対派〕因果関係と同性との両者によって自らを発生せ  
しめる事物の瞬間にのみ把握されることがあり、すべて(の  
事物の瞬間) にあるのではない。

〔唯識派〕感官と直前条件との両者もまた把握されること  
になってしまふ。何故なら、この両者によっても認識作用は  
発生するのだから。また、両者が同性となり、それぞれ(1) 必  
ず対象を把握することになり、(2) 知覚を本体とする(ことに  
なってしまう)。

〔反対派〕(1) この必ず対象を把握するという点で識別作用

が感官と同性であり、(2)また直前条件としての同性即ち知覚を本体とする(点で認識作用が感官と同性である)こと——この両者はすべての認識作用に共通である。けれども、対象に対する同性は共通でない。何故なら、青(い対象)から生じた青の認識作用のみに青の姿があり得るからである。そして(認識作用に)特有の性質は(対象を)判定することである。従って、こういった差異の故に、認識作用は事物を把握し、感官と直前条件とは(把握し)ない。

〔唯識派〕それも正確でない。何故なら、同じものを対象とする直前条件を把握するという過が附随するから。

〔反対派〕認識作用の中に青等の姿を置くもののみが、この認識作用)によって把握される。けれども、連続している識別作用の中に、直前条件から、青等の姿が発生するのはない。そうではなくて、対象から(発生するの)である。何故なら、あらゆる場合に、肯定否定の両論法によって、こ

(の青等の姿)にこそこの(対象)から発生する能力のあることが認められる以上、知覚には知覚の姿を発生させるだけの能力があると理解するからである。

〔唯識派〕(主観に)青等の姿を与えるものが把握されるものである、とは誰の命令なのか。けれども他の何者でもなく、まさしくこの(対象)にこそ把握されるものという本性が定まっている。定めるものがこのようであるなら、本性が

定まっているからこそ定まるのであろう。実に認識作用は、自己の(補助因の)集合体によってそれぞれ決定された事物を意識することを本体とするものとして生ずる。事物も意識されることを本性とすると定まっているからこそ意識されない。感官等はそうでない。従って、姿は(認識の)原因ではない。実に、切断の行為は、この樹と結びついてをり、斧とは結びついていないのに、樹の姿を持たない。そうではなくて、この(切断の行為)の本性と樹の(本性)とは、この(行為)がこの(の樹)にのみ定められてをり、他所に(定められて)ないということである。そして(これがこれの意識である)と別々に確立することは、それが現われていることだけに基づいている。従って、このためにも姿は必要でない。

〔反対派〕姿を有する認識作用によっては事物は意識されないにちがいない。そうではなくて、(認識)自身の姿のみを意識する。

〔唯識派〕(それなら)その事物の存在する証拠がないことになる。先ず、事物の把握も判定もない。実に想定だけが残される。そしてその(の想定)は単なる推測を作用とするが、直接知覚の背後にあるものであるから、直接知覚が起る場合には、自己の作用を捨てて原因の作用を受取り、事物を直観する。けれども、直接知覚が起らない場合には、想定もまた無能にちがいない。何故なら、原因が無いから。

〔反対派〕認識作用の姿は、自己に似た原因を確立せしめながら事物（の存在）を証明する証拠である。

〔唯識派〕それなら、その時粗大な姿を与えてくれる事物も外界に存在するのか。その（汝の）ことばの行方は何か（何を言おうとしているのか）。故に、識別作用中に、対象によって、その（対象）を本体とせるものが粗大なものとして現われることはない。何故なら、一つの点（即ち粗大な点）で否定される以上、多くの点でもまたあり得ないからである。また、もしもこ（の姿）が事物から生じなくて（も）、何らかの原因で、ある時存在しあるいは存在しなくても理解されるのと同じように、他の姿もまた存在しあるいは非存在であっても理解されるであろう。また（汝の）姿説においては、認識作用の諸姿の真偽の区別が理解し易くない、と見做されてしまいそうである。更に、その時もしも（知覚の）姿の原因は必ず知覚の姿に似ていると理解されるなら、知覚の姿は（自己に）似た事物を原因とする（筈である）。けれども、事物が意識されない時、そのような理解はあり得ない。何故なら、原因性と類似性との両者の確認は（それに関係する）両（事物）の把握に基づくからである。従って、姿によって事物（の存在）が証明されることはない。さて、このように（事物が認識の）原因であることは把握されることを特相としてはいないし、姿を与えるのに適していることがそれが原因で

あることでもない。故に「把握されるという特相がないから、知性以外に経験されるものは存在しない。」というの正しい立言である。

次の点からも知性以外に事物は存在しない。もしもこ（の事物）が非精神的ならば、自らは現われ出す、またそれを現わす他者を吾々は認めないだろう。何故なら、常に唯一の姿のみが認められるからである。また、もしも現わす者が存在するなら、それは自ら現われないので、本性の現われない対象を現わすこともないだろう。現わすことの現われないものは現われていないものである。例えば壁等に隔てられた事物の如し。そして、外界の事物は他者にとって現わすことの現われないものである。同様に、（何かを）他者に現わし出す者は、自己が現われる時、同類の他者を必要としない。例えば灯の如し。ところで認識作用は（何かを）他者に現わし出すものである。従って、現われつつある知覚のみが対象を現わし出す。故に、理論から逸脱していない。そうであるので、必ず一緒に認められるから、全知者と非全知者との如く、知られる者と知る者とは不可分（同一）である。別々のものが遍充者であれば、必ずしも一緒に認められない。何故なら、青と黄とが同時に認められるとは限らないからである。そして必ず同時に認められることは、必ずしも同時に認められないことと矛盾する。従って、遍充者の矛盾が

認められるから、別々であること即ち不確定の遍充關係を除くするので、必然性は不可分（同一）の点に確立する。以上が妨害的論証である。

また（一緒（*saṃ*））という語は協力あるいは同一時という意味である。また両者は別異性によって遍充されているから、（汝の説は）矛盾する。）と言つてはならない。何故なら、（吾々の）意図する（一緒であること）は、理由命題を規定するものとして採用しているのではないからである。二月という実例においても、意図する（一緒であること）は眞実のものではない。何故なら、月は唯一であるから。

〔反対者〕全知者によつて知られた瞬間は、それ自体と共に、すべての生物を同時と認めるけれども、これら（の生物）は全知者の認識作用と不可分同一ではない。故に（汝の説は）不決定である。

〔唯識派〕そうではない。何故なら、必然性はないからである。先ず瞬間という点で二者が一緒に認められた時、その二者にはこの必然性があるにちがいない。何故なら、二瞬間は個別に再び認められることはないからである。そうではなくて、こ（の一緒に認められること）は（吾々の）言おうとしてゐることではない。連続という点で一緒に認められる必然性があるのである。ところで全知者の連続と他者の心の連続とが同時に認められることはない。何故なら、全知者はある時

には自己の自我のみに住することもあり得るからである。そして、その時（彼は）非全知者とはならない。何故なら、全知の能力はあり得るからである。例えば料理しなくても料理人であるように、甲が乙という感受によつて知られた場合、甲は乙から区別されない。例えば認識作用の本体（は認識から区別されない）如し。ところで青等は知られる。実に（青等が認識作用と）別々であれば認識作用によつて知られることはないであろう。何故なら、きまつた原因である同一性が存在しないからである。（また）因果性が（この關係を）きめるのでもなくなるからである。また（互に）結びついていない全然別のものが知られるならば、過遍充の過が附随するからである。従つて、別々である場合には必然性の原因である結合關係という遍充者が認められないから、別々であるという異品から除外されている（知られること）は不可分同一によつて遍充されている。以上のことが理由命題の妨害的論証である。これによつて吾という姿もまた認識作用と不可分同一であることが示された。

また把握されるもの・把握するもの・意識が別々に現われることは、唯一の月に二性が現われることのように、迷乱である。この場合においても、久遠来で不断に流れる不可分同一の潜在印象こそ（迷乱の）動力因である。次に言ひ如し。「また種々相は迷乱の識別作用において見られるだろう。

(本当は)二つないのに二月(を見る)如し。」

〔反対派〕もしも外界が非存在なら、この青等の姿を持つ知覚が生ずる原因は何故か。次に言ひ如し。

「対象の知覚はその(対象の)姿をとる。他方その(知覚)は姿に規定される。それは外界(の事物)から(生ずる)かあるいはそれ以外のもの(即ち潜在印象)から(生ずる)かと考察する価値がある。」

〔唯識派〕外界が存在するとしても、その原因は何か。

〔反対派〕青等の事物である。

〔唯識派〕先ずそれは見られない。何故なら事物は常に超感官的であるから。

〔反対派〕結果の種々相によって(事物は)想定される筈である。

〔唯識派〕現に見られている直前条件にこそ能力の種々相を想定したらいいだろう。こ(の能力の種々相)によって睡眠中の認識においても、姿の種々相が起るのである。実にこの場合、場所と時間とに隔てられた諸事物には能力はない。何故なら(そういう事物は)今現に存在しないのだから。

〔反対派〕そうであるなら種々な観念もまたないだろう。

何故なら(1)認識作用が唯一である以上、それから離脱しないものもまた唯一であるという過が附随するからであり、(2)また姿毎に認識作用が異なるなら、諸認識作用はそれぞれ自己の

姿のみに限定されるからであり、(3)(また)これら(の認識作用)から離脱したすべての姿の把握者は存在しないからである。

〔唯識派〕先ず種々な色は現われない。何故なら意識と矛盾するから。ところで非精神的なものは現われるのに適していない。故に、この(種々な)色は認識作用を本体とするものに他ならない。そして姿が異なるから認識作用が異なるのではない。何故なら、唯一である雑色には姿の相違はないからである。例えば青には青を本性とせる唯一の姿があるように、唯一である雑色には種々を本性とせる姿のみがある。そしてこ(の認識作用)を本性とせるものに対して働きつつある認識作用が、全(種々相)に対して働くかあるいは働かないかである。けれども部分的に働くのではない。何故なら、こ(の認識作用)は無部分だからである。けれども、相互に別異であるように現われているこれらの諸部分は雑色ではない。故に、何らの不合理もない。

〔反対派〕粗大な姿もまた同じ方法で主張される筈である。

〔唯識派〕しかし、部分を有する唯一者である粗大なものは理に合わない。何故なら、種々な部分が存在するので、それは種々であることになってしまふからである。

しかるにある者は(唯一の認識作用に存在する認識作用の

姿は、唯一で粗大であるにちがいない。他方（一部分の）震動・（全体の）非震動等の矛盾は、（主観側の）意識と矛盾するから、拒否されねばならない。」と言う。一方他の者は（久遠来の潜在印象の力によって現われている認識作用の姿もまた考察し得ない（即ち吾々の思考を超えている）。（その）真実は虚偽（としてしか現われない。））と言う。

そうであるから、観念なるものは外界を依り所としていない。例えば夢等における観念の如し。そして目醒めている者の観念は柱等の観念である。実に外的依り所の無い事は、観念のみと結びついていて、夢等に見られる。目醒めている者の観念にとつても、観念であることこそ本性である。もしもそれが依り所の無いことを棄て去るなら、まさに本性を棄てることになる。

〔反対派〕すべての観念が依り所の無いものなら、大概念・媒概念・実例等の諸観念は依り所なきものとなる。それ故また、大概念・媒概念等が非存在となるので、推論を進めることが出来ない。また、もしも、これらが依り所を有するなら、他ならぬこれらによって、この媒概念が逸脱することになる。

〔唯識派〕そうではない。何故なら、これらの外的依り所のない（諸観念）が、意識であることのみによって、推論を進めて行く原因となっているのだから。実に、無知によって

知恵に到達することが知られている。例えば、書かれた文字から音を理解する如し。

〔反対派〕音を知らせる文字もまた、本性上実在である。「唯識派」そのとおり実在である。しかし、その本性によって知らせるのではなくて、*k* という文字等の形に附託することによって知らせるのである。故に、これらの結果に対する有効性は非真実であることにちがいない。

以上が前主張の要約である。

- 1 ニヤーヤカンダリーについての和文の紹介は、金倉圓照博士「インドの自然哲学」二四〇頁以下にある。ここに訳出するのは、原文一二二頁二三行以下の部分である。
- 2 感官は超感官的であるとするのがインド一般の考え方。
- 3 *parispurati* の意味が明確でなく。フマデモンは *lie* とし、*ジャー* は *pass beyond* と訳す。
- 4 *Pramāṇavārtika* II. 305 ab, 306 ab 但し *pramāṇam* の代りに *sāhanam* とす。
- 5 フマデモンは *kasya* を *tasya* と読んで、「従って、こ（の）心の中の姿（）は、あ（の）対象（）の指示である。」と訳す。
- 6 *ジャー* は *tad-ātmānah* を次の文につけて訳す。
- 7 *Pramāṇavārtika* II. 389, ab.
- 8 同上 II. 334 但し前半は「もしも知覚がその（対象の）姿をとるなら、それは姿に規定される。」とある。

（同朋大学教授）